



Title	いま「キリスト教学」を問う : 学問史的考察
Author(s)	安酸, 敏眞
Description	日本基督教学会北海道支部2007年度公開シンポジウム「「キリスト教学」再考」, 2007年6月30日, 北海学園大学, 北海道.
Citation	日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録, 1, 1-18
Issue Date	2009-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95284
Type	conference paper
File Information	jscsh_001_1.pdf



いま「キリスト教学」を問う ——学問史的考察——

安酸敏眞

「キリスト教学」再考ということが今回のシンポジウムの主題ですが、「キリスト教学」といえば、京都大学文学部のキリスト教学講座が一番の老舗ですので、まず大学の公式ホームページに記載されている内容を、一瞥してみたいと思います。それによれば、

キリスト教学専修は大正 11 年（1922）に創設されたが、特定の信仰や教義に基づく神学科とは異なり、キリスト教を純粹に学問的な見地から研究することを目的とする。この点で、本専修はキリスト教思想を研究対象とする諸大学の関連講座の中でも特徴的な位置を占めている。研究と教育はキリスト教の歴史と思想の全分野にわたって行われているが、その中でも伝統的には次の分野に力点が置かれている。

1. 旧約・新約学
2. キリスト教思想史、特に古代教父、宗教改革、近代的キリスト教思想
3. キリスト教思想の体系的宗教哲学的研究

こうした諸分野に関して高度な学問的な研究を行うためには、原典に即した文献学的あるいは歴史学的研究を基礎にした、キリスト教思想の厳密な理解が要求される。したがって、本専修志望者には、原典研究を行うに必要なギリシア語、ラテン語、ヘブライ語などの古典語の習得と、近代語（英語、ドイツ語、フランス語など）についての習熟が期待される。また、キリス

ト教の歴史や思想と深い関わりをもつ思想史（教会史や教理史の他に、哲学史や宗教史なども含む）についての知識も大切である。しかし、何よりも、志望者には、キリスト教を学問的に研究したいという意欲と情熱、そして基礎的な語学や知識の学習に要する持続力が望まれる。¹

特別な注釈は必要ありませんが、これを一つの基準として見た場合、はたして今日の「日本基督教学会」はどのような現状にあるのでしょうか。再考されなければならない「キリスト教学」とは、一体どこに問題があるのでしょうか。若干の迂回作業を通じて、こうした点について考察してみたいと思います。

まず、「キリスト教学」と「キリスト教研究」の異同について考えてみましょう。同志社大学神学部は、わが国の神学部としては最古の部類に属しますが、今日とくに一神教の研究で名を挙げています。ここでは古くから『基督教研究』という学術誌が刊行されていますが、その第一巻第一号が刊行されたのは、京都大学に基督教学講座が設置された翌年の 1923（大正 12）年 11 月のことです。その発行母胎となった神学部内部の「基督教研究会」規則第 2 条には、「本会は基督教の研究及び基督教に関する知識の普及を以て目的とする。」と記されています。興味深い事実を指摘しておけば、「発刊の辞」のなかで神学部長蘆田慶治が、「基督教学」に言及していることです。だがそれは神学と異なるものではなく、むしろ「我國基督者の宗教経験に基づいた思想的表現としての神学」、「わが國人特有の創意的な、基督教経験の発露としての神学」とほぼ同義であることが判明します。ちなみに、その学術誌の英文名称は *Studies in the Christian Religion* となっています。いずれにせよ、ここにおける「キリスト教研究」は、神学と一線を画した「キリスト教学」ではなく、むしろ神学研究の一環にほかなりません。

¹ http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/graduate_school/christ.html.

次に、「日本基督教学会」そのものについて考えてみましょう。この学術組織が発会したのは 1952（昭和 27）年のことです。この学会の英文の正式名称は、今日では The Japan Society of Christian Studies となっていますが、1962（昭和 37）年によく発刊された学会誌『日本の神学』創刊号をみますと、意外にも Japan Association of Research on Christianity となっています。しかし翌年には何の説明もなしに、これが今日通用しているものに変更されています。「日本基督教学会規約第三条」には「本会は基督教を学問的に研究する者が相互の連絡を計ると共に基督教学の発達を期する」と謳われており、「キリスト教を学問的に研究する」と同時に、「キリスト教学の発展」ということが明確に打ち出されています。しかし今日まで続く一つの矛盾——少なくともわたしには矛盾と思われま——は、学会誌の名称が『日本の神学』、英文名 Theological Studies in Japan となっており、神学と「キリスト教学」との自家撞着的状況は改善されていないどころか、むしろ深まっていることです。

これに対して、半世紀以上にわたる「キリスト教学講座」の歩みに支えられて、1978 年に設立された「京都大学基督教学会」は、その「規約二」に「本会は基督教学研究の進展を目的とする。」と明確に謳い、その学会誌も『基督教学研究』*Journal of Christian Studies* として、その研究対象が神学ならざる「キリスト教学」であることを明確に打ち出しています。

以上の暫定的考察から浮かび上がってくることは、第一に、十分な方法論的反省を伴わない、一般的な意味での「キリスト教研究」——所謂 Studies in the Christian Religion ないし Research on Christianity ——と、自覚的な学問的・方法論的反省を含む「キリスト教学」つまり Christian Studies とが、玉石混淆の状態にあることと、第二に、「キリスト教学」と神学ないし神学研究——ちなみに東京神学大学の紀要は『神学』（昭和 24 年創刊）、関西学院大学神学部のそれは『神学研究』（昭和 28 年創刊）と名づけられていま

す——との原理的相違が、十分に自覚されていないことです。今日われわれが「キリスト教学」を再考しようとするとき、キリスト教研究、「キリスト教学」、神学というこれら三つのものは、明確に区別されるべきであると思います。

それに加えて、従来きわめて希薄だった視点は、「宗教研究」の一環としての「キリスト教学」ということです。これについては、土屋先生が一家言をお持ちなので、わたしの方では論評を控えますが、一般宗教学との関わりにおける「キリスト教学」、あるいは「宗教研究としてのキリスト教学」ということも、より厳密な考察を必要としているのではないのでしょうか。

二

ところで、われわれが「キリスト教学」を言い表すために用いている Christian Studies という英語の呼称²ですが、実はこれが今日欧米世界でかなりいい加減な仕方で用いられており、この名称を冠する講座・機関は枚挙にいとまがありません。例えば、ミシシッピ大学 (Mississippi College) には The Department of Christian Studies and Philosophy がありますし、メアリー・ハーディン・ベイラー大学 (University of Mary Hardin Baylor) には Department of Christian Studies があります。アメリカには Online Christian Studies Degrees というものがあり、グランド・キャニオン大学 (Grand Canyon University) には Bachelor of Arts in Christian Studies・Biblical/Theological Studies という学位もあります。カナダのトロントには The Institute for Christian Studies という研究所があり、これはトロント大学と密接な関係があるとのことで

² ちなみに、われわれの使用法に比較的近いと思われる一例を挙げれば、クリストファー・ドウソンは、「キリスト教文化の研究」(the study of Christian culture) を論ずるくだりで、この概念を用いている。Gerald J. Russello (Ed.), *Christianity and European Culture: Selections from the Work of Christopher Dawson* (Washington, D.C.: The Catholic University of America Press, 1998), p. 113.

す。それ以外にも、東テキサス・バプテスト大学 (East Texas Baptist University) には、School of Christian Studies/ Department of Religionなる学部・学科があり、ウェスレイアン大学 (Wesleyan University) には The Christian Studies Clusterなるプログラムもあります。それぞれの詳しい中身については承知していませんが、印象的には、ここで言われている Christian Studies は、深い方法的反省の上に成り立っているものではなく、われわれが上で見たような、Studies in the Christian ReligionないしResearch on Christianityのレベルにせいぜいとどまっています。要するに、これらは規制を撤廃された神学の別称、あるいは神学もどきのようなもの、と言っても過言ではないようです。

三

さて、先にみたように、わが国における「キリスト教学」は、大正末期に京都帝国大学文学部に産声を上げたものです。京都大学キリスト教学講座は、1922 (大正 11) 年 5 月に「宗教学第二講座 (基督教教学)」として設置されましたが、この講座は石原謙博士の岳父渡辺荘氏が寄付した奨学資金によって、「キリスト教の学術的研究のため」に設立されたものです。初代の講座担任者は「京都学派の偉大な側流」波多野精一 (1877・1950) でした。波多野はドイツ留学中にいわゆる宗教史学派の原始キリスト教研究にふれ、帰朝後『基督教の起源』(1908) を著して名を馳せました。当時宗教学講座を担任していた波多野は、「宗教学第二講座」の設置とともにこれを兼担し、1927 (昭和 2) 年に兼担を解かれて分担となり、さらに 1937 (昭和 12) 年 3 月には「第二講座」の担任者 (「第一講座」を分担) となりました。かくしてキリスト教学講座は初めて専任教授を持つに至り、同年 7 月に停年退官するまでのごく短い期間、波多野がその任に当たりました。³

³ より詳しくは、『京都大学七十年史』(昭和 42 年) と『京都大学百年史／部局

それでは、波多野はこのキリスト教学講座に何を期待し、何を託したのでしょうか。『波多野精一全集』第六巻には、波多野の書簡が収められていますが、そこにはキリスト教学講座の成立に関する裏事情がところどころに綴られています。それに関連して、波多野は当時のわが国の神学に対しても、忌憚のない意見を表明しています。それを読む限り、波多野は当時の宣教師やその神学にはかなり否定的で、明らかにそれとは異なるものとして「キリスト教学」を構想していたことがわかります。例えば、1926（大正15）年2月17日付けの石原謙宛ての書簡では、次のように述べています。

同志社は神學校のうちでは最もいゝ方だと思ひますが、どうも適當の人がないやうです。それに、神學校出でアメリカでやつて來た人々には、小さく固まつてしまつて何でも出来るやうにうぬぼれ、日本の學界との交渉を求めず、又學問の理想に対する謙遜の態度乃至は向上の努力をもつて居ないものが多いやうです。學者としての氣風が甚だよろしくないやうに感じます。

4

1930（昭和5）年1月5日付けの同じく石原謙宛ての書簡では、さらにこうも言っています。

單なる傍觀者として日本の神學校を觀察しますと、將來に於て非常な努力を必要とするやうに感ぜられます。歐米の神學説の紹介で満足するやうな状態は早く過去に葬つてしまわねばなりません。とに角自分で研究し自分で考へて見るやうにならなけ

史編1』（平成6年）に掲載されている講座紹介記事を参照されたい。前者は武藤一雄によって、後者は水垣 渉によって執筆されたものと推定される。内容的にはほぼ重複するが、『京都大学文学部の百年』（2006年）に掲載されている、片柳榮一による「キリスト教学専修」の記事も参照のこと。

4 『波多野精一全集』第6巻（岩波書店、昭和44年）、190頁（傍点筆者）。

ればなりません。かつては神學校は時代を導いたのですが、今日では一番おくて居るものになつて居ます。神學を實際的活動の方便や道具、——間に合ひさへすればよい道具と考へることが何よりいけないと思ひます。思想と學問とに於ける宗教其ものの形成、實現を考へるように、従つて思想をも宗教の生命のすがたの缺くべからざる要素と考へ、だらしない不眞面目な心持をすて、嚴肅な敬虔な態度を以て神學に向ふやうになることが何より肝要でせう。⁵

波多野がわが国の「キリスト教学」に何を期待したかは、ここに引用した二つの書簡の行間に読み取れますが、それはともあれ波多野の退官後は、教授不在のなかで山谷省吾と松村克己が講座を守りました。1924（大正 13）年から講師を委嘱されていた山谷は、宗教史学派に多くを学びつつもそれとは一線を画す立場で新約学を講じ、1937（昭和 12）年に『パウロの神学』（1936）で文学博士の学位を授与されました。⁶ 一方、同じ年に講師となった松村克己は、波多野の直弟子で、理論的体系的見地からキリスト教の根本問題を追求しました。のちにみずからの学問の集大成ともいふべき『根源的論理の探究』（1975）を著した松村は、1942（昭和 17）年に助教授に任じられましたが、1946（昭和 21）年に占領政策に基づく休職を命じられ、やがて退職を余儀なくされました。

このような不幸な、また危機的状況のなかで、文学部教授会の下した決断は、当時同志社大学神学部長であった有賀鐵太郎（1899-1977）をキリスト教学講座の教授に招聘するというものでした。邦人としてはじめて外国で神学博士の学位を取得した有賀は、教父学を中心とするキリスト教思想史を専門とする俊英で、『オリゲ

⁵ 『波多野精一全集』第 6 卷（岩波書店、昭和 44 年）、207-208 頁（傍点筆者）。

⁶ 詳細に関しては、山谷省吾『溪流—激動期のわが半生—』（日本基督教団出版局、1980 年）、128-131、152-157 頁を参照されたい。

ネス研究』(1943)で京都大学文学博士の学位を授与されていました。1948(昭和23)年、有賀は京都大学からの招聘を受諾して、キリスト教学講座の二代目の教授に就任しました。

四

京都大学キリスト教学講座の教授のポストは、このように波多野精一から有賀鐵太郎へと変則的な仕方を受け継がれましたが、わが国の「キリスト教学」そのものは、この二人の存在と働き多くを負っています(もう一人忘れてならないのは石原謙ですが、ここでは時間の制約上、言及を控えることにします)。後継者となった有賀は、前任者の波多野の追悼号に次のように記しています。

・・・基督教學は基督教學であつて神學ではない・・・。神學は教会の地盤の上にのみ成立し得るものであつて、国立大学は明かに教会的地盤でなく又あつてもならない。あくまでも學の冷靜さを持して自由に基督教を研究し批判することこそ基督教學に従事する者の第一の心がけでなければならぬであらう。・・・波多野先生がかかる學的態度の最もよき模範をわれわれに示して居られたことは何人も是を認めざるを得ないであらう。筆者は力及ばずと雖も常にその學的態度だけは繼承して基督教學の健全な發展の爲に盡したいと希つてゐる者である。⁷

ここには**五**に見るような、有賀の考え方が萌芽的な仕方では直截に表明されています。いずれにせよ、われわれが「キリスト教学」を再考しようとするのであれば、波多野から有賀へと繼承された「學的態度」がいかなるものであったのかを、まずしっかり把握する必要があります。

⁷ 有賀鐵太郎「ヘブライ思想に於ける神と智慧」『哲學研究』第三十五卷第八冊(昭和27年)31・32頁。この論文は「波多野精一博士追悼號」に寄稿されたものであり、ここに引用した文章は、この論文のまえがきの一部である。

波多野の学究人生は、東京帝国大学におけるラファエル・フォン・ケーベル (Rachael von Koeber, 1848-1923) との出会いに多くを得ていますが、彼が独自の学問の道を確立し得たのは、1904-1906 (明治 37-39) 年のドイツ留学であるといっても過言ではありません。この留学は早稲田大学の奨学資金によるもので、一般の留学生のなす旅行の費用も与えられなかった、財政的にはかなり不自由なものであったようですが、彼はベルリンとハイデルベルクの両大学で、当時の一流の神学者と哲学者の講義に出て、計り知れないほど多くのことを学びました。ベルリン大学ではハルナックとプフライデラーの講義を聴講し、ハイデルベルク大学ではヴィンデルバント、ヨハンネス・ヴァイス、トレルチ、およびダイスマンの講義に参列した、とされています。いずれにせよ、波多野はドイツの所謂「1900年頃の文化と文化科学」⁸を貪欲に吸収して帰国し、それを自己の学問のなかに体现させたのです。

一方有賀は、1922-1925 (大正 11-14) 年と 1935-1936 (昭和 10-11) 年の二度にわたってアメリカに留学し——最初はシカゴ神学校 (当時すでにシカゴ大学と提携を結んでいた)、コロンビア大学、ニューヨークのユニオン神学校に、二度目はユニオン神学校に留学し——、1925 (大正 14) 年ユニオン神学校 S.T.M.、1936 (昭和 11) 年ユニオン神学校 Th.D. を取得しています。ユニオンにおける有賀の恩師の A.C. マッジファート (Arthur Cushman McGiffert, 1861-1933) は、ドイツのマールブルク大学のハルナックのもとで 1888 年に学位を取得し、1893 年に母校ユニオン神学校の教会史の教授に就任しました。⁹ ここで若干脇道に逸れますが、興味深い事実を記せば、

⁸ Cf. *Kultur und Kulturwissenschaften um 1900*, herausgegeben von Rüdiger vom Bruch, Friedrich Wilhelm Graf und Gangolf Hübinger (Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1989).

⁹ A.C. マッジファートの生涯と学問については、ハルナックおよび有賀との関係から、今後さらに深めた研究がなされるべきであるが、後出の Robert T. Handy の書物 (注 12) に加え、追悼演説を収録した小冊子 *In Memoriam Arthur Cushman McGiffert 1861-1933* (New York: Union Theological Seminary,

かつてベルリン大学でハルナックとトレルチのもとで学び、のちに *Harnack and Troeltsch: Two Historical Theologians* (New York: Oxford University Press, 1968) を出版した歴史神学者のヴィルヘルム・パウク (Wilhelm Pauck, 1901-1981) ¹⁰ は、1925 年アメリカに渡り、その直前に有賀が学んだシカゴ神学校 ¹¹ とユニオン神学校 ¹² で教鞭を執り——ユニオン神学校を退職した後、パウクはヴァンダービルト大学大学院で教えました、わたしは彼がそこに作った「キリスト教思想史」(History of Christian Thought) のコースで学んで学位を得ました ¹³——、みずからの研究と教育を通して、「ドイツの学問のまさに最良部分」(the very best of German Wissenschaft) ¹⁴ をアメリカに見事に移植しました。しかしパウクが着任する以前に、ユニオン神学校にはすでにマッグファートによって、ドイツの「学問的神学」の伝統が根づいていたことを、われわれは知らなければなりません。有賀はこのマッグファートから、ハルナックとトレルチによって代表されるドイツの「学問的神学」

1933)が、貴重な情報を含んでいる。

¹⁰ W.パウクの生涯と学問については、Marion Hausner Pauck, "Wilhelm Pauck: A Biographical Essay," in *Interpreters of Luther: Essays in Honor of Wilhelm Pauck*, edited by Jaroslav Pelikan (Philadelphia: Fortress Press, 1968), pp. 335-361 を参照のこと。

¹¹ 有賀が留学した当時のシカゴ神学校については、A.C.マッグファートの子息による次の書物が有益な情報を多く含んでいる。Arthur Cushman McGiffert, Jr., *No Ivory Tower: The Story of the Chicago Theological Seminary* (Chicago: The Chicago Theological Seminary, 1965)。

¹² ユニオン神学校の歴史 (A.C.マッグファートおよびW.パウクの足跡を含む) については、Robert T. Handy, *A History of Union Theological Seminary in New York* (New York: Columbia University Press, 1987) を参照のこと。

¹³ 当時の神学部長であり、わたしの博士論文のsecond readerだったジャック・フォーストマン (H. Jackson Forstman, 1929-) は、ユニオン神学校におけるパウクの学生で、ヴァンダービルト大学でパウクとともに「キリスト教思想史」のコースを作ったことを、誇らしげにわたしに語ってくれたが、彼もまたドイツの「学問的神学」の精神をよく継承していた。

¹⁴ David W. Lotz (Ed.), *In Memory of Wilhelm Pauck (1901-1981)* (New York: Union Theological Seminary, 1982), p. 13.

の学統を受け継いだのです。

波多野と有賀との間には直接的な師弟関係はありませんが、両者はそれぞれの留学を通じて、20世紀初頭のドイツの「学問的神学」(wissenschaftliche Theologie)——ハルナックとトレルチがそれを代表している——という共通の学問的伝統に触れ、そこに両者に通底する「学的態度」が成立したのです。「キリスト教学」は、20世紀初頭のドイツのこの「学問的神学」を母胎とし、厳密な学問研究の精神がその根幹となっていることを、今日われわれは再認識すべきであると思うのです。ちなみに、波多野のモットーは、“*genau und richtig, sachlich und gründlich*”¹⁵でしたが、波多野の愛弟子松村は、これを「きちんと正確に、事柄を大切に、徹底的に」という日本語に訳しておられます。果たして波多野のこの精神は、今日のわが国のキリスト教学において希薄になっていないでしょうか。

五

有賀鐵太郎の学問的道程は、大局的な見方をすれば、「神学的解釈学からキリスト教学へ」ということになろうかと思います。彼の学問研究は同志社大学の卒業論文「シュライエルマッヘルの宗教本質論」(1922)をもって始まり、「トレルチに於ける基督教本質論」(1925—1926)やトレルチの『社会教説』に関する解題的研究(1929—1931)を経て、教父学研究に赴き、『オリゲネス研究』(初版 1943)によって、わが国のキリスト教研究を世界的レベルにまで引き上げました。同志社大学神学部から京都大学文学部に移籍後、有賀は「神学的解釈学」の確立というそれまでの目標に代えて、いまや「信仰の共同を前提となしえない一般的学問の場において」、キリスト教学の理念と方法の確立に全力を傾けました。1952(昭和27)年には、有賀は自らが実質的な中心となって「日本基督教会」を設立し、

¹⁵ 松村克己「波多野精一の哲学」『京都大学学生新聞』第11号(昭和49年11月27日)、第2面。

その後も国内外の実に幅広い研究教育活動を通じて、キリスト教学の何たるかを率先垂範しました。ギリシア哲学のオントロギア的思考とは区別さるべき、ヘブライズム独自の思考論理を見いだすにいたった有賀は、「ハヤトロギア」(hajathologia; hayathology; Hajathologie)なる術語を新たに造語し、『キリスト教思想における存在論の問題』(1969)において、キリスト教思想が「ハヤ・オントロギア」(haja-ontologia)と呼ばれるべき「二重構造」を有していることを例証しました。

キリスト教学についての有賀の考えは、『キリスト教思想における存在論の問題』の序章に明確に述べられています。

私は京都大学における基督教学講座担任の教授として、「基督教学」なるものの可能性を追究したのであるが、それはそれに先立つ多年の間、同志社大学の教授として神学の学的確立のために微力を尽くしたことと無縁ではない。当初、私は単純にも理性的批判に耐えうる神学はまた基督教学としても妥当すると考えたのであるが、その考えがなお厳密さを欠いていたことを発見するのに長い時を要しなかった。信仰の共同を前提となしえない一般的学問の場においては、普遍的理性の判断だけが説得力を持つものである。そのような場でキリスト教を学問の対象とすることは必ずしもいわゆる神学の確立を目ざすことではない。むしろ研究者の宗教的信仰の有無また如何を問わず、いやしくもキリスト教を学問的研究の対象としようとする人々が参加しうるような場がそこに開かれなければならない。・・・ここに純粋学的とは特定の神学的前提を持たないということである。もとより完全な無前提ということは人間の営みにとって有りえないことである。無前提と称することは有りえても、それは自称にすぎないのであって、何らかの前提がなければ学問はその出発点も、またその方向も得られるものではない。だが、その前提が真に学的前提であるためには、その前提そのものが徹底

的の、また絶えざる理性的批判によって吟味されることを要する。私が「特定の神学的前提」と呼んだものは、そのような理性の介入を許さない前提を意味するのであって、特に啓示神学の場合には特定の信仰告白から出発し、またはその基礎の上に建てられるのがむしろ常道である。基督教学はその事を一つの客観的事実として尊重することは有りえても、そのような特定の信仰告白を研究の前提とすることはない。それなら基督教学の前提とは何であろうか。それは、宗教的体験および現象が特定の学的対象でありうることを最小限度の前提とするものである。そのことはまた研究者が宗教に対するSympathieを持ちうるものであることをも含んでいる。またさらに、そのような対象に立ち向かうべき方法は、それに対して適切なものでなければならない、当初からそれを否定また除外するような方法であってはならないということを、それは意味する。然しこれらのことを含む前提は理性的批判を拒むような前提ではない。それが学問の前提である限り、学問それ自体の理性が、その自らの前提を批判の領域から外すわけではないのである。¹⁶

要するに、有賀にとって「神学は神学、基督教学は基督教学であって、両者はともに別個の学として成立するものである」。神学は「信仰によって受け取られた神の言葉を理解し解釈して、それを人の言葉を通して適切に語り伝えるためのもの」であるのに対して、キリスト教学は「キリスト教の思想および現象を理性のいとなみとしての学的研究の対象とするもの」であるのです。キリスト教の本質と現象の理解を目指すキリスト教学は、キリスト教の本質を問うことによって、必然的に神学に接近せざるをえませんが、しかしかかる接近にもかかわらず、その精神と方法とにおいて、どこまでも独自の道を進むものでなければならないのです。

¹⁶ 有賀鐵太郎『有賀鐵太郎著作集』第4巻（創文社、1981年）、15・16頁。

六

われわれはさきに、「キリスト教学」が 20 世紀初頭のドイツの「学問的神学」に深く棹さすものであることを指摘しましたが、それではこの「学問的神学」とは一体いかなる特徴を有するものでしょうか。言うまでもなく、これは「近代神学の父」と称されるシュライアーマッハーから 20 世紀初頭のハルナックとトレルチに至る、自由主義的な神学的伝統を指しています。シュライアーマッハーは、17 世紀の科学革命と 18 世紀の啓蒙主義によって、伝統的キリスト教神学が知的威信と学問的妥当性を失ったなかにあつて、宗教の倫理化という方向に活路を見出し、キリスト教信仰共同体の「実定的学問」としての神学を、普遍的な諸科学の中に秩序づけることを通して、神学の再建を図ろうとしました。彼は近代の学問意識・文化意識とキリスト教を総合し、キリスト教信仰と近代文化との間に「永遠の契約」を樹立しようと試みました。その記念碑的成果が、『福音主義教会の原則にもとづいて組織的に叙述されたキリスト教信仰』（通称『信仰論』）ですが、いずれにせよ、彼が目論んだことは、神学をキリスト教に関する「文化科学」として再建することでした。

「文化科学」(Kulturwissenschaft) という概念は、20 世紀初頭にリッカートらによって主唱されましたが¹⁷、ディルタイの「精神科学」(Geisteswissenschaft) の場合と同様、その方法論的基礎づけは、シュライアーマッハーのなかにその先蹤を見出します。19 世紀中葉から 20 世紀初頭にかけてのドイツの学問的神学は、シュライアーマッハーの範に倣って、こぞって神学を文化科学に属するものとして構想したのです。

¹⁷ Cf. Heinrich Rickert, *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft*, 6. & 7. Aufl. (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1926); Wilhelm Windelband, „Geschichte und Naturwissenschaft,“ in *Präludien: Aufsätze und Reden zur Philosophie und ihrer Geschichte*, Bd. II, 7. & 8. Aufl. (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1921), S. 136-160.

シュライアーマッハーの神学的プログラムの実現を、みずからの学問的営為の目標として立てたのはトレルチでしたが、彼は当時の神学の主要問題を「歴史と信仰の乖離」¹⁸のうちに見ました。トレルチによれば、近代の史的批判的方法は恐ろしい破壊力を秘めた「パン種」のようなもので、ひとたび神学に適用されるや、ついにはその全体を変革の渦に巻き込まざるを得ないというのです。「それに小指を与えた者は手全体をも与えなければならない」¹⁹のです。中途半端な適用はもとよりできない相談です。史的批判的方法の神学への適用の結果、釈義神学（旧約学と新約学）と歴史神学（教会史と教理史）は学問的神学として発展しましたが、教義学は純学問的領域から排除されてますます実践神学という性格を帯びるにいたりました。シュライアーマッハーは、歴史神学と実践神学を媒介する共通の根幹として、「哲学的神学」なるものを提唱し、それに弁証学的役割を担わせましたが、トレルチはシュライアーマッハー以後飛躍的に進歩した歴史学の成果を真摯に受けとめ、いまや独立した学問となった宗教哲学を、「神学のための学問的基礎」として位置づけたのです。しかしこの新しい学問分野としての宗教哲学は、精神科学の一部として一般倫理学と密接な関係を持っており、しかも後者は歴史主義の荒波に晒されていますので、歴史哲学による裏打ちを必要としているというのです。かくしてトレルチの神学構想の全体は、歴史の地平から規範を獲得するために、歴史学、歴史哲学、一般倫理学、宗教哲学という諸科学に基礎づけられ、それらとの有機的な関係のうちに立つ、壮大な学際的学問体系となったのです。

要するに、トレルチは精神科学ないし文化科学の総力を結集して、歴史の地平から規範を獲得しようとする新しい学際的神学の必要性

¹⁸ Cf. Ernst Troeltsch, *Gesammelte Schriften*, Bd. 2 (Tübingen: J.C.B. Mohr, 1913), S. 199; idem, *Glaubenslehre*. Nach Heidelberger Vorlesungen aus den Jahren 1911 und 1912 herausgegeben von Gertrud von le Fort, mit einem Vorwort von Marta Troeltsch (München und Leipzig: Verlag von Duncker & Humblot, 1925), S. 81.

¹⁹ Ibid., S. 734.

を訴えたのであり、ここからパネンベルクが「エルンスト・トレルチの精神科学的な神学の基礎づけ」(Ernst Troeltschs geisteswissenschaftliche Grundlegung der Theologie) ²⁰について語るのも頷けるところです。これに対して、F・W・グラーフとH・ルディースは、トレルチの学問構想全体を「キリスト教の《文化科学》としての神学」(Theologie als »Kulturwissenschaft« des Christentums) ²¹として捉えています。

七

トレルチ研究の第一人者のF・W・グラーフ(ミュンヘン大学教授)によれば、トレルチは従来のドグマティックなキリスト教神学を、「キリスト教を歴史学的に研究する文化科学」に、ないしは「キリスト教を歴史学的・解釈学的に研究する文化科学」に「作り変える」(umformen; umgestalten) ²²ことを目指したといいます。ここでいう「文化科学」(Kulturwissenschaften)は、ヴィンデルバント=リッカートの概念として、必ずしも厳密に捉える必要はないでしょう。むしろにディルタイ的な「精神科学」(Geisteswissenschaften)とも両立するもので、現代的な言い方をすれば、「人文科学」(Humanwissenschaften; human sciences)と置き換えることも可能であろうと思います。

いずれにせよ、「文化科学としての神学」は、キリスト教を研究対象として立て、歴史学や解釈学の方法を駆使して研究する人文学的

²⁰ Wolfhart Pannenberg, *Wissenschaftstheorie und Theologie* (Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1977), S. 105.

²¹ Friedrich Wilhelm Graf und Hartmut Ruddies, "Religiöser Historismus. Ernst Troeltsch (1865-1923)," in *Profile des neuzeitlichen Protestantismus*. Bd. 2, Teil 2, herausgegeben von Friedrich Wilhelm Graf (Gütersloh: Gerd Mohn, 1993), S. 295-335.

²² Friedrich Wilhelm Graf und Hartmut Ruddies, "Ernst Troeltsch: Geschichtsphilosophie in praktischer Absicht," in *Grundprobleme der großen Philosophen. Philosophie der Neuzeit IV*, herausgegeben von Josef Speck (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986), S. 128-164; hier S. 133.

学問です。しかしこれこそはまさにわが国で「キリスト教学」(Christian Studies)と称されているものにほかなりません。実際、かつて松村克己は、「神學と基督教學」と題する論文において、キリスト教学は「一方に哲学、他方に歴史学を踏まえつつ、一般文化、学問的共同体の中でキリスト教の理解を求めるものだ」と云ってよい²³と述べていますし、同様に中川秀恭も、キリスト教学を「いわゆるヒューマニズムを基盤にして成立する学問」、つまり「[内容よりも]方法の方に重点がおかれ、したがって、他の[人文学的]学問におけると同じような方法を使っている」学問として規定しています。²⁴

興味深いことに、グラーフも最近の著作において、「歴史的・解釈学的なキリスト教学として構想された神学」(die als historisch-hermeneutische Christentumswissenschaft konzipierte Theologie)について語っています。²⁵ Christentumswissenschaft という用語は、従来のドイツ語の文献のなかにほとんど確認されないものですが、このようにいまやドイツの神学書にも登場するようになってきました。21世紀の神学的ネオロギスムともいふべき Christentumswissenschaft は、グラーフの用法からわかるように、少し前まで「キリスト教文化科学」(Kulturwissenschaft des Christentums)と言い表されてきたものと、ほぼ同一であると思われます。グラーフが Christentumswissenschaft という用語を用いるようになったのは、彼が2000年に来日して京都大学キリスト教学講座で特別講演をして以来のことですので、ひょっとすればわが国ですでに市民権を得ている「キリスト教学」を目の当たりにして、この用語を使い出したのかもしれませんが、いずれにせよ、ドイツ

²³ 松村克己「神學と基督教學」『神学研究』第1号(昭和28年3月)、108頁。

²⁴ 「座談会 日本のキリスト教学(会)の将来」『日本の神学』第17号(1978)、33頁。

²⁵ Friedrich Wilhelm Graf, *Die Wiederkehr der Götter: Religion in der modernen Kultur* (München: C.H. Beck, 2004), S. 252.

における学問的神学の最新の展開が、波多野や有賀によっていち早く確立された「キリスト教学」と、ほぼ軌を一にする方向に向かっているのは、われわれから見て実に興味深い現象だと思います。

以上、「キリスト教学」再考ということについて、思いつくままにあれこれと述べてきましたが、わが国における「キリスト教学」の現状は、当初波多野や有賀が理想としていたものとはかなり異なっているのではないのでしょうか。少なからぬ数のすぐれた業績が生み出されてきたことを否定するものではありませんが、昨今は軽佻浮薄な風潮がわれわれの学会でも少なからず見られます。“**genau und richtig, sachlich und gründlich**”（きちんと正確に、事柄を大切に、徹底的に）——キリスト教学に従事するわれわれは、もう一度波多野精一のモットーを思い起こさなければならないのではないのでしょうか。

（やすかた・としまさ 北海学園大学教授）